



Vol 1

発行所 グループ「汎」

発行日 S52.11.2

編集 佐々木恭一

定価 ￥無料

グループ「汎」企画第1弾!

大塚 正 ALTO SOLO PERFORMANCE

未達のJAZZ

—もし、JAZZが、音楽が、あらゆる擬制との戦いの地平でしか始まらないとしたなら、まさしく、そこは〈音=作業〉の場でしかなく、そこに用意されるのは身体と言葉において他にない。—

日時 12月11日(日)

PM 7:00 開演

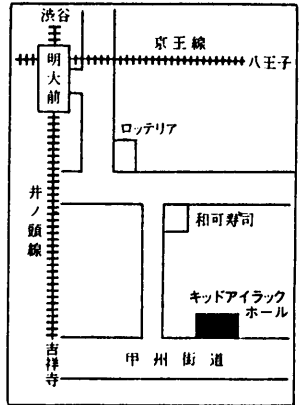
場所 キッドアイラックホール

料金 当日のみ ￥400

問い合わせ

キッドアイラックホール(322)5564

大塚 正 0425(76)1026



企画集団「汎」への覚書

様々な行為が、様々な創造行為が、制度にとり込まれるや否や記号化の速度を増す。そういったものをほくたちが感したとか理解したとかいっても、それは、そうしたことが前提として仕組まれねつ造された制度に敗かれています証にすぎない。ほくたちはどうしようもなく資本に、そして、制度的なものに飼いならされた欲望の体系に包囲されつつあり、資本主義的生理体意識のうちに作りあげていると思いたくなるほどだ。しかし間違っても資本に対しては反資本をなどというテーマは許されぬし、また、表層的な自然回帰などという幼児的空想を許されてはいない。あまりにも多くの反資本、反体制、反文化、自然回帰といった制度的茶番劇にほくたちは遭遇してきたし、それらが体制の補完物としてたやすくとり込まれてしまう喜劇を見てきたからだ。

歩をふみ出したところだ。到達点などない終りなき始まりとして。こういった行為を通して、運動論は運動論を越える過程で、組織論は組織論を越える過程で行なわれる。そして「汎」は絶えず「汎」を無化し「汎」を乗り越え新たな「汎」をめざすといった運動なのだ。

戦績は二つの局面を持っている。一つは個々の内なる戦いであり、もう一つは外へ向けての様々な戦いである。それらは全く個人として担っていかねばならず、その戦線が互いに明確化された地点で共同戦線は張られ、企画集団「汎」が現れるのだ。

佐々木恭一



解 答 (1) 楽 学 音 体

△ジャズ音楽Vの△制度Vの解体
そして新たな△音II作業Vの地平に
向けて

佐々木 恭 一

もに風俗現象の水面に浮上してきた。

マルセル・デュシャンの「レディメイド・泉」という作品は、「R・マッポ」署名された便器である。この作品を制度Vからませて解釈すれば、二つの△制度Vの局面があまりかにならなくなる。一つは、美術館・額縁・といった△制度V内においては、全てが作品となりうるということであり、つまり外在的△制度Vが作品を保障してしまふことである。そしてもう一つは、「泉」という言葉の意味するものと、「便器」の意味するものが重ね合わされるとき、視る行為による象徴概念が宙吊りにされ、つまり、視ることのうちにある△制度V—対象の安定した、あるいは短絡した概念化—に対し、「意味するもの」と「意味されるもの」との間に、言葉を配置させ不平等をさしはさむことにより、それを顕在化させ、破壊していくといったことである。

しかしなぜいまさら△制度Vを取り上げなければならないのだろうか。美術・演劇・等の様々なジャンルで、すでに数年前に表現論として問われ、問い続けることによりある者は新しい表現の地平へ赴いていったし、ある者は沈黙し、ある者は保守反動に走った。その頃、ジャズはよりラジカルなものとして擬装され、アジテーションと

るのか。この問いに対して、美術館や、額縁や、音楽産業が△制度Vであるといったところで何ものも意味しないだろう。それらは互件として存在するにすぎない。ロラン・バルトは、「零度のエククリチュール」で次のように語っている。

古典主義的言語はきままって説得的な連続に還元され、対話の可能性を仮定し、人間が孤独でなく、語が決して事物の恐ろしい重みをもたず、コトバがつねに他人との出会いであるような宇宙を確立している。古典主義的言語は

じかに社会的言語だから、快感の運び手である。集団で、語られるものとしての消費を想定しない古典主義ジャンルとか著述とかいったものは存在しない。古典主義の文学芸術は、階級によって集まった人々の間を流通するオペラであり、当世風の偶発性にしたがって規制される消費のためにあみ出された産物である。(ロラン・バルト

「零度のエククリチュール」傍点筆者)

私たちの想定しうる△制度V的なものというものは、「対話の可能性の仮定」であり「出会である宇宙」であり「快感の運び手」であり「想定しうる消費体系」である。これらは、共同体的な△感覚—知覚Vのあるレベルに達した△了解性Vであるといえるだろう。そしてその△制度Vをささえる互件として、美術館・額縁・音楽産業等があり、極論すれば、歴史的時間の総体としての△社会Vそのものを想定してよいだろう。△ジャズ音楽Vはそれらを背景として対象化される。さらには

存在さえしてしまう。△制度Vという幽霊が一人歩きを始めたのだ。そして△ジャズ音楽Vは逆に△制度Vをめざすといった転倒が行なわれる過程は日常化さえしている。

△制度V的なものをまとめると、だいたい次のようになるだろう。

(1) △制度Vは実体ではなく、共同体的な△感覚—知覚Vの了解性である。

(2) △制度Vは、表現行為を、表現とは無関係な動機により成立させ保障してしまう。

(3) △制度Vをささえる条件としては、歴史的社会的具体的な事象から抽象的事象にいたるすべてを想定しうる。たとえば資本であったり、疑似共同体、疑似風土であったりあるいは政治、宗教、国家といった具合に。

(4) 音楽は現われであり、現れの体験の総体をいうのだが、△制度Vはそれを対象としてあたかも存在するかのように私たちを欺く。

音楽があたかも安定した一個の対象であるかのように了解されてしまうに△制度Vなるものが必然的に背景として介入してくるはずだし、一方、音楽が背景である△制度Vを逆にめざしてしまふという自家撞着は、外在的条件(資本・疑似共同体、等)の△制度Vへの働きかけ、表現主体の△制度Vへの加担、聴き手の△制度V化、といった三者を結ぶ円環がとじられることにより始まる。(図一)

△制度Vは、表現行為を、表現とは無関係な動機により成立させ保障してしまう。

△制度Vをささえる条件としては、歴史的社会的具体的な事象から抽象的事象にいたるすべてを想定しうる。たとえば資本であったり、疑似共同体、疑似風土であったりあるいは政治、宗教、国家といった具合に。

音楽は現われであり、現れの体験の総体をいうのだが、△制度Vはそれを対象としてあたかも存在するかのように私たちを欺く。

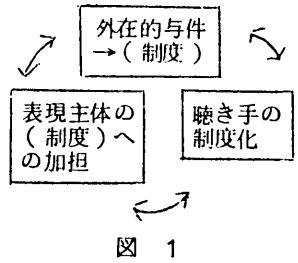
音楽があたかも安定した一個の対象であるかのように了解されてしまうに△制度Vなるものが必然的に背景として介入してくるはずだし、一方、音楽が背景である△制度Vを逆にめざしてしまふという自家撞着は、外在的条件(資本・疑似共同体、等)の△制度Vへの働きかけ、表現主体の△制度Vへの加担、聴き手の△制度V化、といった三者を結ぶ円環がとじられることにより始まる。(図一)

音楽があたかも安定した一個の対象であるかのように了解されてしまうに△制度Vなるものはどこからく

II

△制度Vになるものはどこからく

一体△制度Vなるものはどこからく



考そのものだ。

「音楽にジャンルはない。」などとわかったふうなことがよくいわれるが、私の考えでは、 Δ 制度 ∇ 化される部分でのジャンルは歴然と存在するし、 Δ 制度 ∇ が乗り越えられた部分ではジャンルは問題にはならない、ということになり、その時点でさっきのいろいろさは通用するのだ。そして、音楽が認識の領域に踏み込むことができると思定するならば、それは、自己表出が Δ 制度 ∇ を乗り越えた部分であり、あるいは Δ 制度 ∇ を自己表現の過程で破壊していくといった作業であるはずだ。そして Δ 制度 ∇ 化されている部分は、各個人の嗜好の域を出ることは決してないだろう。

私たちのめざしている音楽が他者に否定される場合の多くは、次の二つのみずれかである。

- (1) であらめである。
- (2) 難解である。
- (1) は Δ 制度 ∇ 化された自分の聴き方を越えるものは全てであらめと称し、自分は Δ 制度 ∇ の円環の安全地帯に安住している。
- (2) は Δ 制度 ∇ 化された自分の聴き方を越えるものは理解できないと認めてはいるが、 Δ 制度 ∇ 化された Δ 感覚 ∇ 知覚 ∇ の了解性に何の疑問も感じず、音楽は分かるもの、もしくは感じるものと決めつけている。

(1)(2)ともに共通なのは、判断が自分の Δ 制度 ∇ 的な聴き方の領域内で行なわれていること、その機能的思考である。何回もいうがこれが私たちの当

面の敵である。

IV

言語学において、 Δ 意味 ∇ は能記(意味するもの)と所記(意味されるもの)が、結合され、同時に切り出される。それが Δ 意味作用 ∇ であり、記号学の一つの構造となる。しかし、言語は能記と所記を貼りつけて、両者が同合(インソジ)性として構造化されているのに対し、一方、音楽は能記と所記が単に並べてある非同合(ノン・インソジ)的な復合体系になっている。したがって、音楽において能記と所記が構造を持つ場合は、言語構造学がある広さとゆるさを帯びた記号学に移行するときには、その構造はあきらかにはされないだろう。

音楽において能記と所記が存在する(と仮定する)ならば、構造としての視点からはとりあえず所記だけを扱うことができるだろう。R・バルトはアメリカの機械主義的言語学に対して、その所記のありかを次のように言っている。「所記が記号の一部である以上、意味論は構造言語学の一部であるべきなのに対して、アメリカの機械主義者たちは、所記は言語学から心理学へ追いやられるべき資料なのである。」(R・バルト「記号学の原理」傍点筆者)所記が心理学の資料であるということ、とりもなおさず所記が恣意性に委ねられているということだ。また、レヴィストロースは先験的に言語記号は恣意的だが、時間的経過とともにそれは恣意的でなくなるという。

音楽における所記の言語におけるそれと違うところは、音楽の所記は、恣意性と一つの体系とのあいだに遍在しているという点だろう。

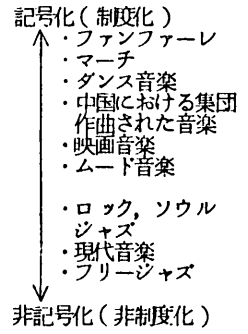
恣意性 Δ 体系というひろがりは所記の強度による。つまり、恣意性の強度が増せば増すほど所記は希薄になり、音楽の記号的性格がやうくなり、逆に、音楽が体系に近づけば近づくほど所記は強度を増し、音楽の記号化が強まる。私たちが Δ 制度 ∇ という言葉を使うとき、それはまさしく記号化の裏面をさしているのだ。次のR・バルトの言葉はそのことをよく示している。

「社会が存在するや否や、すべての使用は、その使用したいの記号に変換されるのであり……(中略)……。意味を現わさない物を再び見出すには、完全に即興的で既存のモデルと何ら似たところのない道具を考え出さねばならない。……(中略)……。記号が一度作られると、社会はたくみにそれを機能化し、それが実用物であるかのようには語ることができる。」(記号学原理 R・バルト)

音楽における Δ 制度 ∇ 化と Δ 記号 ∇ 化の過程は、前者が外から内に向かって進むのに対し、後者は内から外へ向かって進んでいくといえるだろう。そして、両者の強度化といったものはおおよそパラレルの関係にあるといいたいだろう。参考のためにいくつかの具体例を上げてみる。(図2)

「音楽にジャンルはない。」などとわかったふうなことがよくいわれるが、私の考えでは、 Δ 制度 ∇ 化される部分でのジャンルは歴然と存在するし、 Δ 制度 ∇ が乗り越えられた部分ではジャンルは問題にはならない、ということになり、その時点でさっきのいろいろさは通用するのだ。そして、音楽が認識の領域に踏み込むことができると思定するならば、それは、自己表出が Δ 制度 ∇ を乗り越えた部分であり、あるいは Δ 制度 ∇ を自己表現の過程で破壊していくといった作業であるはずだ。そして Δ 制度 ∇ 化されている部分は、各個人の嗜好の域を出ることは決してないだろう。

Δ 制度 ∇ 的音楽はその円環の中で螺旋的上下運動を、その構造として持つにすぎない。そこには孤立よりなれあいが、異化作用より同化作用が、破壊より秩序が、さらにいえば変革より保守反動が、狂気より日常が先行している、しかし間違っているのではないのは、 Δ 制度 ∇ はいかなる判断の基準にもならない、ということだ。ロックやソウルや歌謡曲等は、音楽産業にくみ込まれた利潤追求の商品価値しかもたないとして排したり、フリージャズを、 Δ 制度 ∇ 的なものを破壊した表現だとし、そのことでそれを評価することは許されない。J・ジョップリン、B・ホリデイ、C・パーカー、S・モンク、等 Δ 制度 ∇ に組み込まれていながら自己表出が無意識に(あるいは意識的に) Δ 制度 ∇ の限界を乗り越えてしまったこともあるし、いくら前衛を、フリーを標榜しても、実は Δ 制度 ∇ 化された前衛であったり自由であったりする悲惨な光景もよく目にするからだ。私たちの本当の敵は、そういった機能的思



私たちは次のように断言できる地点にさしかかっている。現在の音楽のほとんどが、やがて、衣裳(モード)の体系のように記号学の体系に封じ込められるか、構造人類学の立場から資料として分類されるかのどちらかだろうと。そして、私たちの手もとに残った音楽は△音楽↑↓非音楽Vか△非音楽Vかである。それらはあらゆる△制度V化、△記号V化に対しそれを乗り越え無化し続けるだろう。そして△意味論Vの意味から最も遠ざかった地点から意味をめざすといった、新たな、△音II作業Vの深みに錘鉛をおろさなければならぬ。△音II作業Vは演奏者も聴き手も含めた△感覚「知覚」Vを構造化し、認識の領域へ踏み込まなければならぬ。まずそこに用意されるのは、音楽でも、音でも、表現方法でも、ましてや楽器でもなく、いわば、世界に投げ出された△身体Vと△言葉Vだけである。

— 未完 —

パルタイをめぐる 組織論は可能か

(1)

共同作業を持統する過程で積もりたものは依然として党派性の問題である。いかにして党派性を乗り越えるか、という過程でしか集団の持続はありえない。

企画集団「汎」は、常に△1プラスXVという個としての主体(1)と複数性としての主体(X)の重なり合う(プラス)ところに生まれる。それは一人の場合も△1プラスXVであり、複数の共同作業の場合も△1プラスXVでありうる。したがって構成メンバーは決まっていない。

もし集団がオルグを通じて成り立つとき、△1プラスXVの接合部分(個人的にも集団的にも)は、△1Vが△XVを包摂する形、△1△XVになり、△XVは必然的に△1Vに集中化されるだろう。△XVは永久的な同伴者となりそこにヒエラルキーがあらわれる。そこには一つのイデオロギーと、加担の論理しかないのだ。逆になれ合いの集団は△1△XVとして現われ、そこにはどんな内部闘争も行なわれず、既成のイデオロギーに傾斜していくか、制度にとり込まれ溺死するかのどちらかだろう。

個人としても集団としても△1プラスXVという構造を持ち、それが共同

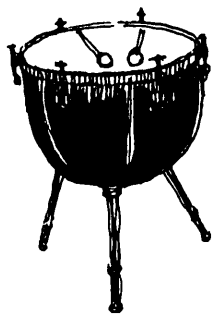
作業を行う過程では、常に△1マイナスイデオロギー・△Xマイナスイデオロギー・△1△XV等のあらゆる変容の可能性が内在するだろう。そして、こういった内部運動が続く限り、個人的作業および集団作業は持続され企画される。集団「汎」へはだれでも侵入することができず出ていくことも自由だ。そして通過することも。「汎」はジャンル規制されない逗留点であり通過点でもあるが断じて拠点ではない。

とりたててはくちには政治日程やらが課せられているわけでも、文化的運動をはれやかに進めなければならぬわけでもない。あらゆるイデオロギーはイデオロギーである限り死へと追いやられなければならない。あらゆる文化は文化的制度である限り解体しなければならぬ。そしてはくちたちは「汎」に対して、あらゆる意味付けも幻想も持てはならない。「汎」は政治的運動体でも、文化的運動体でも、社会的運動体でも、芸術運動でもない。しかし、集団が△1プラスXVという構造を持ち、その接合部にいかなる記号をはさむことができる限り、それは政治的になつたり、文化的になつたり社会的になつたり、芸術的になつたりといったあらゆる変容、戦略を可能性として学んでいるし分派活動も当然起こりえるだろう。

以上は現時点での「汎」の粗描にすぎない。はくちたちとしてもこの先「汎」がどうなるかはわからない。そういった意味では「汎」は固定された集団ではなく現象に近いのかもしれない。し

かしそういったものが不連続的に、不定形に広がるように、あらゆる人の侵入を望んでいる。ただし同伴者としてでなく△1プラスXVとして。

佐々木恭一
大塚 正



編集後記

◎機関紙「汎」の発行は不定期ですが年に2〜3回発行の予定です。

◎「汎」への意見、感想をお寄せ下さい。

◎共同作業としての企画・投稿等を募集しています。

◎大塚正アルトソロパフォーマンスの意見、感想をお寄せ下さい。

企画集団「汎」連絡先
国分寺市富士本一の一の九
今井方
大塚 正
TEL 0425 76 1020